

# 脳と才能

連載第6回  
酒井 邦嘉  
東京大学教授・言語脳科学者

「芸術はとび離れたところにあるのではない。  
芸術作品は、全人格・全感覚・全能力の表現  
である」

『愛に生きるー才能は生まれつきではない』  
p.166 (講談社現代新書、1966年)より

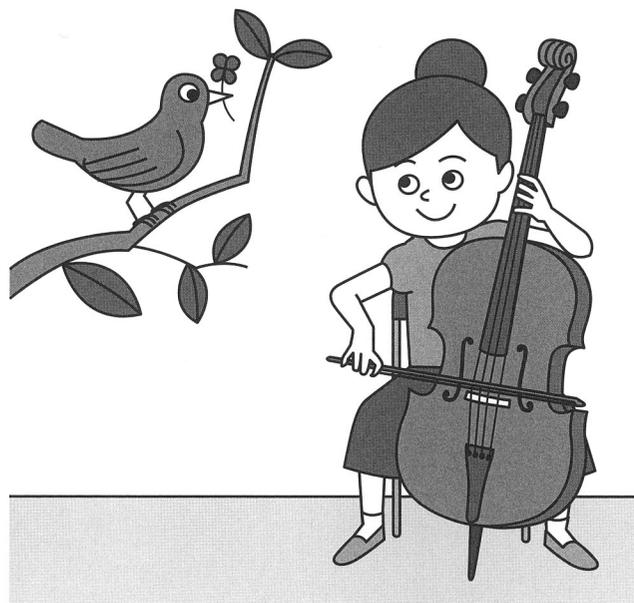
鈴木鎮一先生のお言葉を紹介しながら、その奥義を科学で考えるという連載です。才能教育研究会がめざす「才能」には、どのような意味が込められているのでしょうか。そしてその才能は、脳のどんな働きに支えられているのでしょうか。

芸術とは自分とかけ離れた高みにあるのではと思って人は、意外と多いかもしれません。私も学問について、長くそのように理想化して考えていました。しかし、その道を究めた学者や芸術家に会って話をしてみると、本当に謙虚で飾りけのない方がほとんどであることに驚きます。例えば指揮者・作曲家として活躍されている曾我大介さんは、一緒に朝日カルチャーセンターの講座を担当すると(そしてその後の打ち上げでも)、嬉々としてユーモアたっぷりに音楽の話をしてくれます。そして、その人柄こそがオーケストラや聴衆を自然と楽しい気持ちにする

のだ、と私は思うようになりました。鈴木先生は次のように書いています。「芸術を志すほどのものは、その羨望と憧憬のま toward かって遠い道を歩くものだと思ひ、わたしはその秘密をさがしたのです。〔中略〕芸術の実体は、そんな高いところ、遠いところにあるものではなかった。それはもっとも日常的なわたし自身にあったのです」(同p.166)

この「芸術の実体は～わたし自身にあったのです」という言葉は、Gerald Klickstein氏の「The Musician's Way: A Guide to Practice, Performance, and Wellness」

(Oxford University Press, 2009)で、「創造の過程に専心すること」という一節(第5章)の冒頭に引用され、世界中に知られています。この本は、そうした深い洞察を織り込みながら、演奏時の脱力法など、どの楽器にも役立つようなアドバイスの宝庫となっています。最近になって、その翻訳が出たのですが(『成功する音楽家の新習慣ー練習・本番・身体の戦略的ガイド』ヤマハミュージックメディア, 2018)、このタイトルの訳からして誇張があるように感じます。謙虚に芸術を志す人にとって本当に必要なことは、「成功する」ことを目的として「戦略的な新習慣」



ミチルが青い鳥といっしょに、「鳥の歌」を奏でていきます

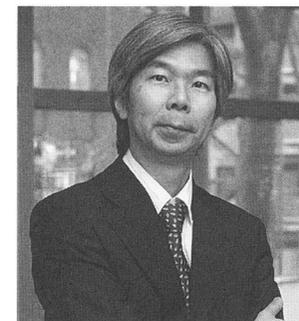
を持つような野心や慢心と無縁ではないでしょうか。前回の連載でも紹介しましたが、「向上心の中にのみ真実への道を歩いていった人々」が、結果として成功したわけですから。



このように考えると、はるか遠くにあるように見える芸術が、実は言語などの人間の身近な営みと共通しているように思えてきます。もちろん「美意識」といった感性は、言語から独立したものですが、美しい音楽を楽しむということもまた人間の本性であることになりま

うになったのは、『芸術を創る脳ー美・言語・人間性をめぐる対話』(東京大学出版会, 2013)という本を作ったのがきっかけでした。そして、才能教育研究会との共同研究を通して、この思いはさらに確かなものになりつつあります。

ドイツに留学中だった鈴木先生は、冒頭の言葉のようにして「芸術の秘密」に気づかれました。「全人格・全感覚・全能力」とは、まさに演奏家の人となりである「才能」のすべてでしょう。そして、「もはや、芸術とはなにか」という問題は解決されたのです。あとはただ自分でやればよかったです。より高く、自分をみが



酒井邦嘉 (さかいくによし)  
1992年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士。専門は言語脳科学で、人間に固有の脳機能をイメージング法などで研究している。主著に『言語の脳科学』『科学者という仕事』『科学という考え方』(中公新書)、『脳の言語地図』『ことばの冒険』『脳の冒険』(明治書院)、『脳を創る読書』『考える教室』(実業之日本社)、『芸術を創る脳』(東京大学出版会)、『チョムスキーと言語脳科学』(インターナショナル新書)。

きなおすーそれでよいからです」(同p.166)と確信されました。それはちょうど、メーテルリンクの戯曲『青い鳥』のようですね。「青い鳥」は幸福のシンボルだと思われがちですが、本当はそうした秘密に気づけるような「知恵」を指しているのかもしれませんが。このことを「あとがき」で指摘している、未松海子さんの新訳(岩波少年文庫, 2004)をおすすめします。みなさんも音楽の「青い鳥」を身近なところ

